

9・11 ジェネレーション
米国留学中の女子高生が学んだ「戦争」
国崎玲子

190781151 劔日向

9・11同時多発テロ事件

2001年9月11日に4機のアメリカの国内線の航空機4機が同時にハイジャックされ、経済、軍事を象徴する建物に相次いで突入する自爆テロ事件。

イスラーム過激派のテロリスト集団アルカイダによって行われた。

犠牲者は約3000人、負傷者は6000人以上。

プロローグ

2001年9月11日に起きた同時多発テロ事件の際、筆者はアメリカ東部のチョート校にいた。その当時目の当たりにしたショックと悲しみそして犯人像が見えない恐怖を感

「外の世界に出ると多少のリスクは標的にならない」といって切られ「これから何がおきていくという空気にみちていた。



変わりゆくアメリカ 9月11日の衝撃

9.11からアメリカ全体の空気の変化

事件復讐は批判されていた政策を反省して正す代わりに、＜犯人捜し＞と増したが、次第に「報復」の演習に代わっていった。

拍車全保がたその＜処罰＞という攻めの演出をすることで国内世論を味方につけた。による「合衆国国家安楽法」を用いる」という法案

これは国際法に反になるが反対はなく、逆にブッシュ大統領の支持率は90%近くになる。

この全米を覆う議論を封じ込めて攻撃態勢を整える風潮が広まり、筆者は疑問を抱き続ける。

これは復讐か

2001年10月7日アフガニスタンにて、「対テロ戦争」と位置付けられた作戦が実行される。そしてこの戦争に引き続きイラクのサダム・フセインが次なる攻撃標的にされる。

この戦争と同じくアメリカ内では炭疽菌事件が起き、この事件は各地で起きた。

- 大量破壊兵器
- 独裁国
- テロ根絶

アメリカ全土が

フロリダ州の新聞社に届いた郵便物から炭疽菌に感染した男性が死亡。

その後、他の郵便局でも同様に発生し、計5人が死亡、20人が発症した事件。

となる。団ら
ない。暮ら
者が

自由な伝統という価値観

筆者が帰国する際、空港のセキュリティに引っかかってしまう。テロ事件発生前のアメリカの空港のセキュリティはとてもお粗末な物であったが、テロ事件後の厳戒態勢下では大幅な強化がなされていた。

そのため「国内線であっても警備の関係で2時間の余裕をもつこと」が義務付けられていた。

このことについて筆者はアメリカ人が大切にしている、**プライバシー、自由、時間、効率**を自ら犠牲にする姿勢に国民の意識の大きな変化を感じたとのべている。

9.

4つの課題

1. 少人数での比較的安価な武器を使用したテロの防止
2. 国家間の核兵器の不拡散
3. 地球環境の保護
4. 不平等な富の分配の解消

筆者の
よる
11
「9
ネー
視線
多くの国が被ったことも事実である。

ヤードソンに
世代は「9.

国中心的な
岸に世界中の
11の余波を、

彼の説く「自国の繁栄にうぬぼれ、思い上がるのではなく、力を有効に使うためのアドバイスを受け入れる心を持つべき」という国際協調路線に、筆者は単なる理想主義ではないと感じた。

同時多発テロから1年

新年度の開始直後に起きた同時多発テロからの1年間は、全てのトピックが9. 11にまつわる物だった。

そのためその年に筆者の通う学校の卒業生からは「卒業式のスピーチでは9. 11の話題は避けてほしい」という声も上がっていたそう。

1年たったにも関わらず9. 11の影響は大きく残っており、筆者がスペインへ短期留学際にも、学校の責任者から「**アメリカ人とわからないように行動せよ**」と注意をうけていた。世界に誇っていた「Born in the U.S.A」というアイデンティティーを必死に隠す様子からあらためてアメリカの大きな変化を感じた。

アメリカについて

多様性を誇る超大国であるアメリカの生活が変化して
いっている。

そして、報復戦争から世界がアメリカを見る目が厳しく
なりつつある。

「内向的だ」と批判されたアメリカが塞ぎ込み、外部
から新たな攻撃を呼べば、本当に孤立してしまうのではない
かと筆者は危惧している。

この事件を通して、**アメリカは無敵でない**ということ
を実感した。

イラク攻撃は避けられたか、戦争の影

9・11は悲惨な事件であったが、それと同時に超大国が自らの行

しかし「アメリカを嫌っている」とされる「相手」は発展途上国やイスラム諸国に限られていると考えられていた。

それは、これまでの合意

求めるのではなく、先制攻撃をためらわず行うことだ」と国民は説得された。

しかし9・11直後には多数派に属していた米国が協力という流れに逆らい始めた。そこから「正義」対「悪」という構図に疑問を持つ人が増えはじめた。

正当な戦争

9. 11から1か月もたたないうちにイラク攻撃を念頭においていたアメリカは、外交は戦争の下準備に過ぎないのか、武力行使は政治的解決の最終手段なのか、これに関する論争で米仏間でぶつかり合っていた。

この討論のなか引用されていたのが「**正当な戦争**」の

1. 武力行使は最終手段である。
2. 攻撃対象として軍と民間人は区別する。
3. 適切な権限を持つものが正義の名の下で開戦する。
4. 勝利の公算が高い
5. 目的とする平和に現状況よりも進歩がみられる。

戦争とジャーナリズム

イラク攻撃開始直後は、筆者の通う学校内でも、反戦
いたった戦争を肯

従軍取材に参加していたCNN看板特
派員が戦争中の報道自制について、
ブッシュ政権とFOXニュースに属する
彼らの部下から脅迫されていたと告
発した。

「いてくる」イラ
うな側面もある。
く政府に対して
が間違いなく実

また政府とメディアが結びつき他者を威嚇していた指
摘もこの時あったという。

世界のリーダーたちへ

各国の指導者は、**国益を追求することが最終的な任務**。平和でさえ、その枠組みの中に含まれてしまうのだろう。自国の利益を守るという理論で、ブッシュ大統領も「米国の安全は自ら防衛する」と宣言した。手段は別として、その態度は当然である。

しかしこのことについて多くの米国民は政府政策のからくりや戦争の全体像を知らされないまま「他国は単独行動のための軍事力を持たないから、我々な戦いに反対するのだ」と結論づけつつあることが問題なのである。

そのため米国民にかかわらず世界中の人々がそしてその当事者が**正確な情報を吟味する力**を持つことが大切である。

教育理
イラ
ば「そ
た」と
同時多
な情報

核や原子炉等に使用するためウランを濃縮する際に生じるもの。銃弾に使うことで通常のものより貫通力が高まる。

しかし、使用された地域では免疫不全をはじめとした健康被害が発生。

情報操作で代表的なものな物は「劣化ウラン弾」である。

「劣化ウラン弾は今回のイラク攻撃でも使用されていることは米軍は認めているが、周辺住民への健康被害はフセイン政権が乱用した化学兵器によるものだ」と言い切っている。

日米の戦争観

a. 筆者が使用していたアメリカ史の教科書は、太平洋戦争の章においてアメリカ側の責任を非常に厳しく追及していたようだ。

しかし、戦争において行ったどの決定においても当時は反対意見を押しさえつける形で正当化されているものだった。

これはイラク攻撃でも同じことで、歴史的に時間がたって自己批判を繰り返しても反省して改めなければ意味がない。

b. 筆者は、アメリカ人の戦争に対する認識は自分のものと根本的に異なる

歴史的に戦争に合衆国の分裂を
にとっては武力

「おさげの軍隊—1812年戦争でイギリス軍の上陸を食い止めた勇敢な灯台守の姉妹の話」

その証拠に日本の小・中学校では反戦に関する授業があったが、アメリカでは“An Army in Pigtails”や“Phoebe and the General”など軍隊をサポートし愛国心を鼓舞する話

る話

歴史的に戦争に合衆国の分裂を
にとっては武力
フィービーと将軍—父親の要請によってスパイになりワシントンの命をすくった少女の話

こするため

平和という責務

a. 世界のほとんどの国が20世紀に大戦や内戦で街が焼け野原になった経験を持つ。

市民が犠牲になること知ったものは権力が集中することに危機感を感じる。そして災禍が目に見えれば報復を通じて同じ苦しみを他人に与えることが簡単にできない。

世界中の紛争に密接に関わっておきながら、直接的損害を免れていたアメリカこそが指導者の一言を機に世論が好戦的に転じる変わり身の早さを見せたことは偶然ではない。

b.ピンポイントの爆撃でクリーンな戦いが実現されるという宣伝を人々は信じてしまった。

それは現場の軍事関係者が困惑するほどリスクを低く見積もった国防長官をはじめ、戦争とは苦しみと混沌で有ることを無視した者たちが下した決断に、間接的であるが加担した。

しかし、戦争の実体験がないのは今に生きる私たちも同じである。

平和に恵まれた国は発展を遂げてきた。しかし、だからといって戦闘の現実に対して無知であることは許されない。

過去に自国を襲った戦禍とこの瞬間も異国の地で人々を苦しめる戦禍から関心をそらさないために目隠ししようとする見えざる手を払いのけなければいけない。と筆者は締めくくっている。

エピローグ

9・11の悲劇から学ぶべき教訓は、今後直面する脅威を「ならず者国家」から発射されるミサイルとしてイメージしているのでは、捉え方があまりにも狭すぎる。

危機を未然に食い止めるためには、テロの口実である〈人々の不満〉を確実に解消する。

そして世界で流通している兵器を管理・削減し、犯罪者に適切な裁きを与えるシステムを整え、国が円滑に情報交換できるような協力体制を整える。

傲慢に暴力的に敵を増やすか、話し合いを重ね、平和の代弁者となるか。選択するならば後者を選びたい。

おわりに

この本を読んで、同時多発テロの内容というよりは、同時多発テロが起きた時のリアルなその場の状況が理解できた。

私は同時多発テロで一方的にアメリカが被害を受けただけだと思っていたが、全くもって違い逆にアメリカの良くない部分や弱い部分があらわになった事件だと思った。

そしてテロは何の理由もなく起きるものではないので、その原因となる人々の不満などをなくすため、様々なところに耳を傾け、受け入れることが大切だと思った。